

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」



フィクション劇場 第一話
「芸能リポーター」

大太
大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お
おた・だい）と申します。つたない作品
にご興味を持って頂き、ありがとうございます
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている事や疑
問に思っていることなどに対して、「も
し、こういう設定や条件になったら、当
事者たちはどう動くのか」を考えたオム
ニバスドラマです。フィルム・バイヤー
さんではドラマ部門に全二十五話をまと
めて公開しており、それと同様に完全著
作権フリーですので、詳細はそちらをご
覧下さい。マスメディアに少々風が向い
ている「性根の曲がった社会派ドラマ」
で、この第一話はその中から、芸能人関
係を題材にした作品をセレクトした話と
なります。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

【登場人物】

柿本 雅子（かきもと・まさこ）（29）：大日本テレビ制作局芸能部専属の芸能リポーター。愛称は「まっちゃん」

如月 秀人（きさらぎ・ひでと）（27）：人気アーティスト。昔の仲間の間での愛称は「ヒデ」

（イントロ）

望月 弥生（もちづき・やよい）（24）：如月の恋人

芸能記者 A（男・50）：芸能専門のベテラン記者

芸能記者 B（男・26）：芸能記者 A の後輩
芸能記者 C（男・43）

（柿本 監禁）

足ツボマッサージ師（初老の男）A、B
（如月の仲間…全員ごつい&人相悪い）

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

渡辺 聡（わたなべ・さとる）（26）：如月のワル時代の仲間。リーダー格。愛称は「ナベ」

大宮（おおみや）：同右

石川（いしかわ）：同右

飛田（とびた）：同右

寺島（てらしま）：同右

滑川（なめかわ）：同右。逮捕される

（大日本テレビ）

芸能部デスク（男・55）：柿本の上司

岸本（きしもと）：芸能部部員

高西（たかにし）：同右

柴田（しばた）：同右

池田（いけだ）（男・27）：報道局局員

（ワイドショー）

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー 司会者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー アシ

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

スタント

小川（男…37）：如月逮捕時のレポーター

古谷（ふるや（声のみ））：週刊誌編集長

（ホテル）

ホテルの受付（女…35）

ホテルの支配人（男…57）

ホテルの従業員（男…40）

タクシー運転手A、B

芸能記者（複数人）

報道記者（如月逮捕時 複数人）

ホテルの客

警察官（護送者運転手、赤坂警察署の道路規

制など）

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

【あらすじ】

芸能リポーター柿本雅子は、歌手の如月秀人を追いかけているが、それが原因で如月は恋人の望月弥生と別れることになってしまう。激怒した如月は、柿本を連れ去り、自分への専属取材を許す代わりに、他のリポーターを追い払うことと、連れ去ったことを口外しないことの2つを約束させる。守れない場合は片目の視力がすごく悪くなると暗に脅す。その後、如月の取材を独占しようとした柿本だが、事情を知らない他のリポーター陣の行動が抑えられず、1つ目の約束が破られる。そして、自分が連れ去られたことが勝手に週刊誌に報じられ撤回も出来ず、それが原因で如月が逮捕され、2つ目の約束も破られる。報復を恐れた柿本は逃走するが、如月の仲間居場所を突き止められ、約束を守らされる。動画配信者になった柿本だが、自宅や自身のChにも追い込みを掛けられ、気が触れる。その中で、柿本はもうやめてくれと懇願する。

○コンサートホール 関係者出口（昼）

如月秀人がリハーサルを終えて、ホールの裏口から出てくる。

サングラス姿。

そこに芸能リポーターがむらがり、如月が歩いていくのに合わせて歩いていく。

その中に長髪ジーンパン姿の柿本。

柿本雅子「如月さん！ 一般女性との熱愛報道がありますが、本当なのでしょうか？」

柿本は如月にマイクを向けるが、如月は何も言わず、無視して道路に止めてあるタクシーに乗り込もうとする。

柿本「ショッピングモールで女性と二人でいるところを見かけたという話がありますが、それが恋人の方なのでしょうか？」

柿本は再び如月にマイクを向けるが、無視してタクシーに乗り込む。

タクシーが動き出す。

柿本はその車の後方に停めていた「予

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

約」の表示のタクシーに乗り込む。

運転手に向かって、

柿本「あの前のタクシーを追って！」

運転手A「分かりました」

他の芸能記者は柿本の乗ったタクシー
を目で追っている。

その様子を見ている芸能記者A。

芸能記者A「さすがは、まっちゃん。準備万
端だな」

芸能記者B「まっちゃんって、あの女性のこ
とですか？」

芸能記者A「そうだ。柿本雅子。俺たちは『ま
っちゃん』って呼んでる」

芸能記者A「最近、リポーターを始めたらし
いが、バイタリティーがあって、古参の連
中も一目置いてるよ。なんでも、学生時代
に陸上をやっていたって話で、体力勝負で
グイグイ押していくタイプだ」

芸能記者B「へえ、そうなんです。とこ
ろで先輩、この如月って奴は、芸能界入り

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

する前は、結構ヤンチャしてたって聞いたことがあるんですが、その辺は探らないんですか？」

芸能記者A「ああ。そこは事務所の力で押さえ込まれてる。下手に立ち入らない方がいい」

芸能記者B「でも、今回の熱愛報道には、圧力はかけてこないですね」

芸能記者A「まあ、芸能界入りした後のことは、本人に任せてます、ってスタンスだからな。やりすぎないように考えているわけさ」

芸能記者B「いろいろと複雑ですね、芸能界ってのは…」

柿本の乗ったタクシーを目で追う芸能記者B。

○如月の自宅（夜）

如月が自宅でくつろいでいると、恋人の弥生からSMSにメッセージが入る。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

望月弥生（文字）「秀人くん、今日もまた居る」

如月は驚いて返事を返す。

如月（文字）「大丈夫だよ。弥生は一般人だ。

あいつらも変なことはしてこないよ」

弥生（文字）「でも、この前、知らない女の人から声を掛けられた」

如月（文字）「どんな感じの人だ？」

弥生（文字）「ジパンの女の人」

如月は柿本だと察知する。

如月「：」

如月（文字）「それで？」

弥生（文字）「買い物に行ってたんだけど、ずっと話かけられて。怖かった」

如月「：」

弥生（文字）「秀人くん、もうやめにしない？

私、こんな生活耐えられない」

如月は驚く。

如月（文字）「もう少し我慢してくれないか？
今、事務所とこれからの話をしてるんだ」

弥生（文字）「もう無理」

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

如月は弥生に電話をかけるが繋がらない。

呆然とする如月。

その呆然とした表情が、段々怒りに変わる。

如月は電話をかける。

如月「ナベか？」

渡辺聡（声）「おお、誰かと思ったらヒテか。久しぶりだな。人気アーティスト様がオレに何の用だ？」

如月「おいおい冗談はやめろよ、ナベ。昔のよしみでお前らに頼みたいことがある」

渡辺（声）「オレ達にか!? あまりいい話じゃなさそうだな」

× × ×

○路上（夜）

ネオンの輝くバーの前の路上に車が2台止まっている。

渡辺は車に寄りかかりながら、

渡辺「お前、マジでやるつもりか!? そんな

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

ことしたら、自分がどうなるか分かってる
だろ!？」

如月（声）「ああ、分かっている。お前らに何か
あったら、全てオレのせいにしていい。：
引き受けてくれないか？」

渡辺「まあ…、今はこんな風だが、お前はす
っとオレらのダチだ。こういうことには慣
れてるしな。いいぜ」

如月（声）「すまんな…。詳しい話は追って連
絡する」

× × ×

○如月の自宅（夜）

渡辺（声）「分かった。じゃあな」

如月が電話を切り、電話を見つめる。

如月が空を見上げる。

○会社からの帰り道（数日後…夜）

柿本（声）「それじゃ、失礼します」

柿本が会社から外に出る。

柿本「コンビニに寄って、ご飯買うか…」

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

歩道を歩いている柿本の後ろから、車が2台近づいてくる。

1台目の助手席の渡辺が笑顔で、

渡辺「すいませーん。もしかして、芸能リポーターの柿本さんですか？」

少し、怪訝そうな顔をして、後退りする

柿本。

柿本「そ、そうですけど……」

大宮「おお、本物だ！ みんな来てみる。い

つもTVで見てる有名人だぜ！」

エンジンをかけたまま、ドライバー以

外の仲間が車から降りてくる。

渡辺が服で手を拭いて差し出す。

渡辺「こんなところすいませんが、握手し
てもらえませんか？」

柿本「……は、はい……」

渡辺は少しシェイクしながら、柿本と
握手する。

柿本は手を離そうとするが、渡辺は両
手で握る。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

渡辺が、手を自分の方に引っ張って、柿本を見る。

渡辺「柿本さん…、ちょっと付き合ってもらえませんか？」

柿本、驚く。

柿本「ちよっ、何を！」

渡辺「おいっ！」

渡辺の声に呼応して、メンバーが柿本を捕まえて、1台目の車に押し込む。

仲間も車に乗る。

渡辺「出るぞ！」

2台の車が走り去る。

○港の荷物置き場（その日の夜）

柿本は木製の椅子に座らされ、手は後ろで、縛られている。

足はハの字で前に伸ばされ、足首の下に石の重しがあり、それに足首が縛られ、固定されている。

服はそのまま、裸足。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

口は白のガムテープで塞がれている。

柿本「うう」

柿本が目を覚まして、周りを見回す。

如月が、柿本の後ろから歩いてくる。

そして、柿本の右斜め前に立つ。

如月「すみませんねえ…、柿本さん。無理や

りお越し頂いて」

柿本「ううっ」

如月「まあ…、やってることは、あなたと差して変わらないですけどね」

柿本「うう」

如月「いや、私を追いかけて、足が疲れてい
るでしょうから、マッサージでほぐして差
し上げたいと思いましたがね」

如月が手を挙げる。

柿本の正面の暗がりから、白いチャイ
ナ服を着た足ツボマッサージ師A、B
が現れ、柿本の両方の足裏の前に座る。

如月「マッサージの時間と強さを調節します
ので、まず、『普通』で受けてみて下さい」

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

如月「お願いします」

マッサージ師が足裏をグリグリして、柿本は体を反って、足を曲げるようにして痛がる。

柿本「ううっ！ ううう！」

如月は手を挙げて、マッサージを止める。

如月「…どうですか？」

柿本は如月を見る。

如月「…では、強さと時間を決めて頂きましたよ
うか？」

如月が柿本にフリップを見せる。上から「施術時間」、「1分」、「10分」、「60分」と書いてある。

如月が「1分」を指差す。

如月「あまり疲れてないようでしたら、1分でもかまいませんが…」

柿本、首を縦に振る。

柿本「うんっ、うんっ」

如月は柿本の目を見る。

如月「あっ…、もっと下がいいんですね？」

柿本、目を見開いて、首を横に振る。

柿本「うゝ！ う！ゝ」

如月「まあ、そう遠慮なさらずに。大は小を兼ねると言いますから。60分で行きまし

よう」

柿本、尚も首を横に振る。

柿本「ううゝ！ ううゝ！」

如月が別のフリップを持つ。2行に別れており、上の行には「強さ」、下の行には左に「弱い」、真ん中に「普通」、右に「強い」と書いてある。

如月「次は、強さを決めて頂きましょうか。

…普通くらいでいいですか？」

柿本、首を横に振る。

柿本「うゝっ、うゝっ」

如月、柿本の顔を見る。

如月「『普通』の横ですか？ では、『強い』
ですね？」

柿本が目を見開き、首を右から左に振

る。

柿本「うっ！ うっ！」

如月「もしかして、『弱い』ですか？」

柿本、首を縦に振る。

柿本「うんっ、うんっ」

如月、柿本を見る。

如月「柿本さん、あなたはホントに奥ゆかしい方ですねえ。ここは思いっきり……」

如月は柿本に顔を近づけて、手を胸に、

如月「……私に甘えて下さい。『強い』で行きましよう」

柿本、目を見開いて、如月を見る。

如月「では、『60分』、『強い』でお願いします」

二人のマッサージ師が頷き、施術を始める。

柿本が、体を仰け反ったり、屈んだりする。足を曲げようとする。

柿本「うっっ！ うっっ！」

如月「……それでは、終わったことに帰ってき

ますね」

如月は、振り向き様に、柿本の座っている椅子の足を見ている。

机の足は、カタカタと不規則に音を立てて揺れている。

× × ×

柿本は、涙目でうつろに上を向いている。

如月「柿本さん、いかがでしたか？ 疲れが取れて、リフレッシュできたでしょう？」

柿本は、上を向いたまま。

如月「私がちよっと強引にお連れしておいて、恐縮なのですが…、2つお願いしたいことがあります…」

柿本、如月の方に、ゆっくり首を向ける。

如月は、人差し指を立てて、「1」を作り、柿本の顔の前に出す。

如月「…1つは…、あなたに私への専属取材を許可しましょう」

柿本、目を見開いて、首を縦に振る。

柿本「!?、うん！ うん！」

如月「但し、他のレポーターは絶対に近づけないで下さいね」

柿本、首を縦に振る。

柿本「うん！ うん！」

如月は、人差し指と中指で「2」を作り、柿本の顔の前に出す。

如月「もう一つは、当たり前のことですが…、今夜の件は絶対、内緒にして下さいね」

柿本、首を縦に振る。

柿本「うん！ うん！」

如月「もし、この2つの約束が破られたら…」

如月、柿本の耳に顔を近づけて、囁く。

如月「片方の目が…、すごく、悪くなっちゃうかも知れませんよ…？」

柿本は、目を見開いて如月の顔を見る。

如月「守って頂けますか？」

柿本、目を見開いて、首を縦に振る。

柿本「うん！ うん！」

如月「例え…、私が雷に打たれても、ですよ？」

柿本、目を見開いて、首を縦に振る。

柿本「うん！ うん！」

如月「それでは、ご自宅までお送りしましょう。目隠しはして頂きますが…、ね」

○大日本テレビ 制作局芸能部フロア（昼）

柿本が居心地悪そうに、自分の机に座ってノートPCを叩いている。

そこに、デスクが近づき、両手を後ろにして、柿本を覗き込む。

デスク「大丈夫か？ まっちゃん。3日も休むなんて君らしくもない。何かあったのか？」

柿本は、デスクから目を逸らす。

柿本「いえ、別に…」

デスク「なら、いいんだが…」

デスクは覗き込むのを止める。

デスク「今日、如月がイベントで外出するって、情報が入ったんで、行ってもらうと思ってただけど…」

柿本は、驚いて振り返りデスクを見る。

柿本は「デスク！　そういう事は早く言ってお下さい！　私、行きます！」

デスクは怪訝な顔をする。

柿本「私、如月さんの専属になったんです！

必ず、いいネタを取ってきます！」

柿本、ノートPCを畳み、自分のバックに入れて、飛び出す。

デスクの視線が柿本の後ろ姿を追いかける。

デスク「専属？　ホントならいいが……」

○如月の自宅（当日…昼）

如月の玄関前には、すでにリポーター陣が集まっている。

その前に柿本が立つ。

柿本「みなさん、聞いて下さい！　私は如月さんから、専属取材の許可を頂きました！　私の方から後でインタビューの内容と動画をお渡ししますので、お引き取り下さい！」

報道陣がざわつく。

芸能記者A「おい、まっちゃん。そんな話、聞いてないぞ」

芸能記者B「そうだよ。こっちはこっちでいい絵を取ってこいって言われているんですよ。全部一緒じゃ、どうしようもないじゃないですか？」

芸能記者C「契約書とかあるの？　ウチらを出し抜いて、自分だけおいしいところを持って行こうってんじゃないだろうな？」

柿本、語気を強める。

柿本「詳しい事は、言えないけど私が専属になっただんです！　ウソじゃないから、早く帰って！」

柿本と、報道陣が言い合いになる。

そのうち、如月が自宅の玄関を出て、階段から降りてくる。

報道陣が、階段下に殺到し、マイクを向ける。

その様子を、如月は冷めた目で見てい

る。

柿本は、報道陣に押されながらも、両手を広げて静止しようとする。

柿本は、振り返って如月の方を見る。

柿本「如月さん！　これは…」

如月は無表情のまま、人差し指で「1」を作って、柿本に見せつつ、口元を上げる。

柿本「!？」

柿本は目を見開いて、顔面蒼白になる。

柿本「如月さん！　これは違うんです！　す

ぐに退かれますから、待って下さい！」

柿本はレポーター陣を押し返そうとする。

柿本「みなさん、早く帰って下さい！　如月

さんは私の取材しか受けません！　私

が専属なんです！」

押し合いへし合いが続く。

○大日本テレビ　制作局芸能部フロア（昼）

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

柿本はボクとしながら、ノートPCを叩いている。

(フラッシュ)

如月が「1」を出した場面。

(フラッシュ終わり)

柿本の手が止まる。

柿本M「あれは、一つ目の約束が破られたっという合図に違いない！」

柿本M「でも、もう一つの約束は大丈夫……」

私が何も喋らなければいいんだから……」

柿本から少し離れたところで、三人の

芸能部員が、週刊誌を見ている。

一人は椅子に座って、もう一人は立って机に両手をついて、最後の一人は机に座っている。

岸本「まいったなあ。また、週刊誌にやられちゃったよ」

高西「まったくくだ。向こうの取材力は凄いな」

柴田「ウチのワイドショーも、ここに金払って記事使ってるくらいだからな」

岸本「しかし、あのクリーンなイメージの如月が、女性を拉致して暴行するなんて考えられないけどなあ。昔、ヤンチャしてたって話は聞いたことがあるけど。それにこの話、ついこの前のことらしいじゃん」

柿本「!？」

柿本は、その話を聞いて背筋を伸ばしながら驚き、席を立って3人に足早に近寄る。

柿本は手を出して、

柿本「その記事、見せて！」

部員の三人は、顔を見合わせる。

高西「まっちゃんは、如月のことを追ってるから流石に気になるか」

柿本は週刊誌を剥ぎ取るように手に取って後ろを向く。

柿本が週刊誌を読む。

見出しには「人気アーティスト 如月秀人、女性拉致暴行疑惑！」の文字。
柿本は記事を読む。

柿本「：小誌は、人気アーティスト如月秀人が女性（M子さん）を拉致し、マッサージと称して暴行を加えたのと情報を得た。M子さんからの直接の証言は得られていないが、如月が本件に深く関わっている証拠が得られている：」

柿本M「：って、これ私のことじゃない！ 何でこんな事知ってるの？ 早く取り消してもらわないと！」

柿本は、3人の方を見る。

柿本「この週刊誌、貸して！」

柿本はオフィスを出て、階段の踊り場に行く。

○同 芸能部フロアの階段踊り場（昼）

柿本は、週刊誌の背にある、発行元の出版社に電話する。

柿本「もしもし、週刊文々さんですか？ 私、芸能リポーターの柿本と言います。今週号の如月秀人さんの記事について、至急、お

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

話したいことが。はい、編集長の古谷さんに取り次いで頂けますか？」

古谷（声）「はい、代わりました。古谷です」

柿本「古谷さんですか？ 何ですか、あの記事は！ 如月さんはそんなことする人じゃないですよ！」

古谷（声）「柿本さん、そう申されましても、私どもは取材を尽くした上で記事にしておりますので…」

柿本「私は如月さんの専属取材を許されてい
るんですよ！ そんなことはありません！」

古谷（声）「それは、そうでしょう。こういう
犯罪まがいのことをしました、なんていう
訳ないですから」

柿本「じゃあ、これはどこからの情報なので
すか？ 信憑性はあるんですか？」

古谷（声）「それにはお答え出来ませんね。あ
なたもご存知でしょう。情報源の秘匿は守
らないと」

柿本「でも…」

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

古谷「ただ、信憑性は高いですよ。こちらのやり方はご存知でしょうか？ 既に第2弾、第3弾を用意してますから。まあ、向こうの出方次第ですが……」

柿本「……」

古谷「柿本さんだから、お話ししますが、写真とか動画とか、そういうのを見せられて、これは嘘だ、とは言えないでしょう？ もっとも女性は口に白のガムテープを貼られてたので、顔はよくわかりませんでした……」

柿本が顔面蒼白になる。

柿本M「誰が……？ 車の人？ それともマジサージの人？ とにかく止めないと……」

柿本がスマホを耳に近づける。

柿本「古谷さん！ 実は私、この女性を知っているんです！ その女性が、この話はどう終わったことだ、だから静かにしておいて欲しいって言っているんです！ お願いですからこれ以上、記事にはしないで下さ

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

いー！」

古谷（声）「…さすがは柿本さんだ。私どもが
コンタクト出来ていない女性をご存知だと
は…。どうです？ その情報を頂けません
か？ もちろん相応のお礼はしますよ？」

柿本「そんなこと、出来る訳ないでしょう!？」

古谷（声）「残念ですね。では、取材して見つ
けることにしますよ」

柿本「だから、さっきから言っているんです！

これ以上、記事にしないで欲しいと。お願

いだから、言うことを聞いて下さいー！」

古谷（声）「すみませんが、いくら柿本さんの

お願いとは言え、こればかりはねえ…」

古谷（声）「…それに…、これはあなたにとっ
ても悪いことじゃないと思います…」

柿本「!？」

古谷（声）「…そういえば、M子さんの『M』
は柿本さんのイニシャルと同じですねえ…」

柿本「わ、分かりました！ もういいです！」

○同 芸能部フロア（数日後…昼）

柿本がオフィスでノートPCに向かっているが、目の焦点が定まらず、手が止まっている。
まっっている。

岸本「なあ、如月の件だけど警察が動いているって話だぜ」

高西「やっぱり、あのネタ、ホントらしいな」

柴田「でも、被害女性は見つかってないってことは、被害届は出てなんだろう？ 何で警察が動けるんだ？」

岸本「状況証拠とか誰かのタレコミとか、共犯が特定されたとか。そういうのがあるんだろうな。とは言え相手が相手だから、念には念を入れてって感じなんじゃないか？ 重要参考人あたりとか」

柿本が部員のところに飛んでくる。

柿本「そ、その話、本当なのっ!？」

岸本が柿本の方に振り返る。

岸本「ああ。報道部の同期に聞いたんだ。まだ、確定した訳ではないらしいけど」

柿本が岸本に顔を近づける。

柿本「報道部の誰っ！」

岸本が少し、仰け反る。

岸本「い、池田って奴だよ」

柿本、階段を降りて、報道フロアに走っていく。

高西「まっちゃん、如月のことになると必死
だなあ」

柴田「専属取材の許可貰っているらしいから、
インタビューでもするつもりなんじゃない
か？」

○同 報道局フロアの廊下（昼）
報道局フロアの廊下で、柿本が池田と
話をしている。

池田「困りますよ、柿本さん。こんなところに
呼び出して何の用ですか？ 僕にも仕事がある
んですよ」

柿本「如月さんが警察に目を付けられている
って、本当なの？」

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

池田は怪訝そうな顔をする。

池田「誰に聞いたんですか？ それ」

柿本「ウチの岸本くんよ」

池田はおでこに手をやる。

池田「アイツは、ホント口が軽いなあ。これからネタ渡すのやめようかな」

柿本「そのことは、どうでもいいの！ 信用できる話なの？」

池田「ウチは報道ですよ。警察記者クラブもありますから。確かな情報です」

柿本「今、どういう状況なの？」

池田「…岸本みたいに吹聴しないでしょうね？」

柿本「私を信じて下さい！」

池田「仕方ないなあ。今回だけですよ。今は、証拠固めの最終段階ってところですね。共犯と思われる人物がゲロしたらしいんですが、それが、如月の昔の友人みたいで。逮捕も時間の問題ですね」

柿本「被害者が特定出来てないのに、そんな

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

曖昧な話を報じるのですか!? 取りやめて
下さい！」

池田「柿本さんは、警察のことをあまりよく
知らないみたいですね。レアな場合ですが、
被害届なしでも逮捕することは出来るんで
すよ」

柿本「どういった場合にですか？」

池田「例えば：、被害者がおおごとにしたく
ないケースとか：」

柿本の顔が青ざめる。

池田「ただ、そういう場合は、被害者の協力が
得られない可能性が高いので、逮捕され
ても、不起訴処分ってところですね」

池田「ただ、今回の事件がホントなら如月っ
て奴のダメージは大きいですし、女性ファ
ンが多いみたいですから、芸能界復帰は無
理でしょうね」

池田「その辺は、柿本さんの方が詳しいと思
いますけど」

柿本「：」

池田「それに、ウチでこの事件をどう扱うかは、デスクやキャップの意見、他の事件との重大性の兼ね合いで決まるんですよ。尺が決まっていますから。僕は取材をして情報を上上げるだけです。決定権はありません」

柿本「そ、そんな…」

池田「岸本の手前、話をしましたが、報道サイドに首を突っ込むのはやめた方がいいですよ。ただ、逮捕となれば、写真とかをお借りすると思いますので、その時は協力して下さいね。じゃあ、仕事に戻らないといけないので、失礼します」

○同 芸能部フロア（警察中継）（数日後：昼）

柿本は、オフィスのノートPCの前に座って、そわそわと作業をしている。机の左には、自身のスマホを置いて、自分のところのワイドショーの音声を消して見ている。

そこに、デスクがやってきて、柿本の横にしゃがむ。

デスク「まっちゃん、やっぱり気になるか？」

柿本は、デスクの方を見ずにそのまま。

柿本「当たり前です！」

デスク「逮捕されれば、こっちも忙しくなる。

準備しておいてくれ」

柿本が席を立ち、トイレに向かう。

岸本はその様子を見ながら、柿本の力バンにGPS発信機を入れる。

岸本はその場を立ち去り、柿本が戻ってくる。

スマホに「速報」の文字とともに、赤坂署前が映し出される。

多くの報道陣が陣取っている。

柿本は、すぐにイヤホンを耳につけて、音声を聞く。

○ワイドショー（昼：以下、ワイドショー内）

宮原「ここでアーティストの如月秀人さんに

関する速報が入ってきました。小川さんが、赤坂署の前にいます。小川さん？」

（赤坂警察署前）

マイクを持つ小川。

小川「こちら、赤坂警察署前です。アーティストの如月秀人容疑者が、拉致監禁容疑で逮捕されました。繰り返します。アーティストの如月秀人容疑者が拉致監禁容疑で逮捕されました。如月容疑者の乗せた車が、赤坂警察署に向かっているとのことですよ」

（ワイドショー）

宮原「小川さん、今回は被害者が特定されていないままの逮捕となりましたが、今後の取り調べはどうなるのでしょうか？」

（赤坂警察署前）

小川「警察関係者の話では、如月容疑者は、容疑を認めているものの、被害者の情報については黙秘しているとのことですよ」

（ワイドショー）

宮原「それでは、全容説明はこれから、とい

うところでしょか？」

（赤坂警察署前）

小川「そうですね。警察としては、如月容疑者の供述の裏付けを取るために、被害者の証言は必要不可欠であると考えています。如月容疑者の身柄を確保したことで、安全は保証されたとして、被害者に名乗り出るよう促す予定です」

○同 芸能部フロア（警察中継）（昼）

スマホを見つめる柿本。

柿本M「出頭した方がいいのかな…？ でも、あの時、何人が居た…。その人たちは多分グルだろうから…、どうすれば…？」

○ワイドショー内

（赤坂警察署前）

小川「あ、今、如月容疑者を乗せたと思われる車が赤坂署に入って行きます！ 如月容疑者を乗せたと思われる車が赤坂署に入っ

て行きます！」

如月を乗せたバンが警察署内に入って
いく。

小川「大型のバンの後ろに如月容疑者と見られる人物が見えます。何かのサインのようなものをしているように見えますが……」

如月はフラッシュを焚かれながら、不適な笑みを浮かべて、ピースサインをする。

小川「これは……、ピースサインでしょうか？
ピースサインをしているように見えます」

○同 芸能部フロア（警察中継）（昼）
スマホを見つめる柿本。
ピースサインを凝視する。

顔面蒼白。

柿本M「こ、これって……？ 二つ目の約束も破られたって意味!？」

（ワイドショー）

宮原「小川さん、ありがとうございます。

引き続き情報が入りましたら、知らせて下さい」

宮原「しかし、澤田さん。逮捕されてピースサインというのは、これは反省の色が全く見えませんね」

澤田「そう思います」

宮原「とにかく、続報を待ちたいと思います」

○同 芸能部フロア（昼）

柿本は自分の机の上で、固まっている。そして、意を決してカバンを持って立ち上がり、デスクの机に小走りに行く。

柿本「デスク、すいません。今から2週間ほど休みます」

デスク、驚く。

デスク「今からか？」

柿本「はい！何かあったらメール下さい！」
デスク「お、おい、まっちゃん！」

柿本は走ってフロアを後にする。

デスク「何かあったらって…、何かあったのは今なんじゃないのか…？」

○大日本テレビ玄関前（昼）

柿本は、道で手を振り、タクシーを止める。

柿本は足早に乗り込む。

○タクシー車内（柿本）（昼）

柿本「東京駅まで！」

柿本はカバンを抱えて、小さくなって
いる。

○大日本テレビ 近くのビル横（昼）

柿本を建物の陰で、渡辺が見ている。同
じように手を振って、タクシーを止め
る。

タクシーに乗り込む。

○タクシー車内（渡辺）（昼）

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

渡辺が柿本の乗っているタクシーを指さす。

渡辺「前のタクシーを追ってくれ！」

運転手A「あの黄色いのか？」

渡辺「そうだ」

運転手は斜め後ろに乗っている渡辺を

横目で見る。

運転手A「なんかドラマみたいだな。あんた

警察の人か？」

渡辺「こんな警官がいるかよ。でもまあ、後で警官になるけどな」

運転手A「？」

渡辺「ちゃんと前を向いて運転してくれ。どこに向かっていている感じだ？ 高飛びできそうなところだ」

運転手A「高飛び？ ますます刑事ドラマみたいだな」

渡辺「つべこべ言わずに答えろ！」

運転手A「うーん。この道だと、多分、東京駅じゃないかな？」

渡辺はスマホで柿本のカバンに仕掛けたGPS信号を受信していることを確認する。

渡辺M「よし、ちゃんと動いているな」

渡辺はSMSで、他のメンバーに「東京駅集合」とメッセージを打つ。

○東京駅（昼）

渡辺は他のメンバーを見つけ、駅のコンコースに集合させる。メンバー達を見回す。

渡辺「全員揃っているな」

大宮「いや、滑川のヤツがサツに捕まってるが…、大丈夫なのか？」

渡辺「それは問題ない」

大宮は首を傾げる。

大宮「何でだ？」

渡辺「あらかじめ捕まることになってる」

大宮「そりゃ、ちょっと酷くないか？」

渡辺「ヒデの指示だ。あいつも納得してる」

渡辺はメンバーがスーツケースを持っているのを見る。

渡辺「服は大丈夫だな」

石川「ナベ、こんなもん何に使うんだよ」

渡辺「お前は考えなくていいんだよ！」

渡辺はスマホで時間と柿本のGPSでの位置を確認する。

渡辺はメンバーを見渡す。

渡辺「みんな聞いてくれ。オレたちはこれから、柿本っていう女を追う。ヒデから自分が捕まったら、動くように言われているんだ。その柿本ってヤツのカバンにはGPS発信機を入れてある」

飛田「それを追うってことか？」

渡辺「そうだ。それを見ると、どうやら新大阪方面の新幹線に乗ったようだ。ただ、途中でGPSの動きが止まったりしている。時刻表から見て、多分、『こだま』だ」

メンバー達は渡辺の話に耳をから向ける。

渡辺「だから、俺たちも次の『こだま』に乗る」

寺島が手を挙げる。

飛田「ナベ、それは構わんが、そんな金持っていないぜ」

渡辺は不適な笑みを浮かべ、ポケットから、札束を取り出して、見せる。

渡辺「金の心配はいらねえ。ヒデからたっぷりもらってるからよ」

○「こだま」車内（昼）

「こだま」車内で、3列を対面にして、メンバー達が座っている。

乗車している位置は車両の一番後ろ。席の後ろにはスーツケースが置いてある。

渡辺は下を向いて、スマホで柿本の位置を確認している。

大宮「しかし、ナベ。そのGPS発信機、よかつけられたな」

渡辺「なあに、あそこの社員にやさしくお願ひしたら、快く引き受けてくれたぜ」

大宮「：お前もワルだな：」

石川「でも、ナベ、大丈夫か？ この前の足つぼの時といい、今回といい、これじゃあ、バレたら俺たち全員、お縄だぜ？」

渡辺はメンバーの方を見る。

渡辺「今更心配する立場でもないだろ？ 俺らは」

石川「まあ、そりゃそうだが：」

渡辺「ヒデには世話になってるんだ。アイツの頼みは断れねえよ」

渡辺がGPSを確認して、熱海で新幹線を降りたことが分かる。

渡辺「女は熱海で降りたぞ。準備しろ！」

大宮「準備って何を：」

渡辺はスーツケースを叩く。

渡辺「トイレで着替えるんだよ、早くしろ！」
メンバーは次々とトイレに向かっていく。男性トイレのランプが点灯する。女

性トイレは消えたまま。

渡辺「おい！ 女の方も使え！」

石川「ナベ、こんな狭いところ、両方とも無理だぜ」

渡辺「そんなじゃ、熱海で降りたら多目的トイレを探すんだ」

石川「でも、先客がいるんじゃない？」

渡辺「いねえよ！ 熱海はビルじゃねえ、駅だ！」

大宮「しかし、熱海って、随分賑やかなところに行くんだな」

渡辺「ホテルにでも隠れるつもりなんだろう。

熱海は多いからな。木は森に隠せてヤツだ」

大宮「ナベ、難しいこと知ってるな」

渡辺「こう見えても、小学生の時は、優等生って通ってたんだぜ」

渡辺「もう直ぐ着くぞ。急げ！」

○熱海のホテル（フロント）（昼）

柿本は山際のホテルに、肩にかけた力
パンをギュッと抱え込み、周りをキョ
ロキョロしながら入ってくる。

ホテルのフロント受付は柿本に向かっ
てお辞儀をする。

受付「いらっしやいませ、お客様。ご予約は
頂いておりますでしょうか？」

柿本「いえ。とにかくどこでもいいので、部
屋ありますか？」

受付「はい、空いておりますが……」

柿本「それじゃあ、その部屋、二週間でお願
いします」

受付は不審がる。

受付「は、はい、かしこまりました。それで
は、お手続きをしますので、宿泊カードに必
要事項をご記入下さい」

柿本は少し考えて、「正木 貴子」と偽
名を記入する。

受付「正木さま、本日は身分証明書をお持ち
ですか？」

柿本「忘れたんです！ 2週間の間に持ってこさせますから、とにかく部屋をとって下さい！」

受付は柿本の勢いに押される。

受付「は、はい。ではそのように」

受付は準備をする。

受付「正木さま、お待たせしました。513号室をお取りしましたので、キーをお受け取り下さい」

柿本、フロントに身を乗り出す。

柿本「私を呼ぶ人が居ても、絶対、取り継がないで下さいね！ 食事も部屋に持ってきて！」

受付はたじろぐ。

受付「は、はい。かしこまりました」

受付はお辞儀をする。

受付「では、正木様、ごゆっくり」

柿本は、お辞儀が済む前に、カードキーをもぎ取ると、足早にエレベーターに乗る。

受付「あのお客様さん、どこかで見たような気がするんですけど…、でもお名前を聞いたことがないし、気のせいかしら…」

○同（柿本の部屋・以下、昼）

（ドア前）

柿本は513号室のドアにカードキーを入れて部屋に入り、部屋の中のカードフォルダにカードを入れて、部屋の電気を点ける。

そして、ドアノブに「D o N o t D i s t u r b」の札をかける。

しかし、チェーンロックはかけていない。

（部屋の中）

柿本はカバンをベッドに置いて、仰向けに寝る。

柿本「…どうしよう？ とりあえず時間稼ぎできそうだから、何か考えないと…」

○同 玄関前

ガサ入れ姿の渡辺とメンバー達が、2
台のタクシーを降りて、走って入って
くる。受付は気圧される。

(フロント)

5人はフロントに一列に並ぶ。

受付は圧で固まる。

渡辺が警察手帳を見せながら、

渡辺「大阪や」

受付はキョトンとしている。

受付「？」

渡辺の横にいる大宮が、渡辺に顔を近
づけて小声で、

大宮「おい、疑われてるぞ：」

渡辺は咳をして、

渡辺「んんっ、：ああ、すまない。私たちは
大阪府警の者だ。ウチの部署は荒っぽいこ
とを担当しているんで、こういう連中が多
いんだ。そこは勘弁してくれ」

受付は困惑しながらも、表情を少し緩

める。

受付「し、承知しました。で、どのようなご
用件でしょうか？」

渡辺が胸元から柿本の写真を取り出し
て、机に置いて、受付に見せる。

渡辺「ここに、この女が泊まっているな？ 芸

能リポーターの柿本雅子だ」

受付はハツとする。

受付「お顔が似ているお客様はいらっしゃい
ますが…、お名前が…」

渡辺「名前は多分、偽名だろう。確かめたの
か？」

受付「い、いえ。身分証明書は後で持ってく
ると…」

渡辺「だとすると、ほぼ間違いないだろうな」

受付「…」

渡辺「それで、その女、何か持っていなかつ
たか？」

受付「確か…、肩にカバンを掛けていたと思
います。ギュッと抱え込んでいたような…」

渡辺はメンバーを見渡し、頷く。

渡辺「やはりな：」

受付「カバンがどうかしたのですか？」

渡辺「我々に、女が爆弾を持っているという情報が入っている。その様子から見ると可能性が高いな」

受付は驚く。

受付「ば、爆弾!? 早くお客様を避難させないと！」

受付は電話を掛けようとするが、受話器を持った時に渡辺が制止する。

渡辺「待ってくれ。客全員に、そのまま伝えたら、パニックになるだけだ。責任者を呼んでくれ、直接話がしたい」

受付「わ、分かりました。直ぐに呼びます」

× × ×

支配人「：状況は分かりました。それで、私どもはどうすれば：」

渡辺「その女が居るフロアの客だけを避難させてくれ。爆弾はそれほど威力ないと聞いて

ている」

支配人と受付は渡辺の言うことを前の
めりで聞いている。

渡辺「それと、理由はフロアの水漏れという
ことにしてくれ」

支配人「後はどうすれば？」

渡辺「このホテルには広間はあるか？」

支配人「は、はい。3階に宴会場がございま
すが……」

渡辺「よし、そこにフロアの客を誘導してく
れ。水漏れで、配線がショートするかもし
れないからエレベーターではなく、階段を
使うよう指示するんだ。他の階の人間がエ
レベーターを使えないようにもしてくれ」
支配人「かしこまりました」

渡辺「あと、この女の部屋番号を教えてください。

マスターキーもだ。避難の方は頼んだぞ」

支配人「は、はい、すぐに取り掛かります」

支配人と受付は、電話で5階の客に連
絡を始める。

○同 3階の宴会場

5階から避難してきた客がポツポツ入ってくる。避難客が従業員に話す。

客「水漏れって言ってたけど、いつ治るんだよ？」

従業員がお辞儀をする。

従業員「お客様、大変申し訳ありません。今、業者を呼んでいまして、至急修理するよう
に手配しております」

× × ×

フロントに、全員避難したと電話で連絡が入る。

支配人「全員避難としたと連絡が入りました」

渡辺「ご苦労だった。後は俺たちに任せてくれ。後、万が一のために、1階の非常口を開けておいてくれ」

支配人「かしこまりました」

渡辺「よし、行くぞ！」

渡辺を先頭に、エレベーターにメンバ

ーが走って行く。

エレベーターに乗って、5階を押す。
乗り込む。

しばしの間の後、メンバーが沸く。

大宮「ナベ！ 会心の演技だったぜ。ヒヤヒヤさせるよ」

渡辺はメンバーの方を向く。

渡辺「こう見えても、小学校の頃は、演劇部で主役を張ったこともあるからな」

メンバーは、エレベーターを降り、柿本の部屋のドアの前に集まる。

ドアノブには、「D o N o t D i s t u r b」の札が掛かって来る。

渡辺はそれを見る。

渡辺「…居るな」

渡辺は、メンバーを見回す。

メンバーは頷く。

渡辺はドアをノックする。

○同 柿本の部屋

(部屋の中)

柿本「は、はい？」

柿本、ドアの近くに行く。

柿本「どなたですか？」

(廊下のドア前)

渡辺「警察の者ですが、お聞きしたい事が…」

(部屋の中)

柿本「け、警察の方ですか？」

(廊下のドア前)

渡辺「はい、そうです」

(部屋の中)

柿本M「何だろ？ ホテルで何かあったのかな？」

柿本はドアを開けようとするが、止める。

柿本「…どういうご用件ですか？」

(廊下のドア前)

渡辺「いや、あるアーティストの事件のことで、少し…」

(部屋の中)

柿本 M 「如月さんのこと？ でも何で警察が？ チェックインは偽名でしてるの？ ここにいることを誰にも言っていないし、私に関係してるなんて知らないはずだし…」

柿本は大きな声で、

柿本 「わ、私は、事件とかそういうの何にも知りません！」

(廊下のドア前)

渡辺 「そんなことはないでしょう？ … 『柿本』さん？」

(部屋の中)

柿本 「な、何で私の名前を？ あなた方、誰ですか？ 何のために来たんですか？」

(廊下のドア前)

渡辺 「私たちですか…？」

ドアに顔を近づける、渡辺。

渡辺 「私たちは、如月秀人との…」

(部屋の中)

渡辺 (声) 「…約束を守りに来たんですよ」

柿本、顔面蒼白。

ドアを叩いたり肩から押して、開けられないようにする。

柿本「帰って下さい！ フロントに電話しますよ！」

（廊下のドア前）

渡辺「…無駄ですよ、柿本さん。ホテルは『警

察』が押さえていますから…」

（部屋の中）

柿本「帰って下さい！ 早く帰って！」

柿本はドアを叩く。

柿本はチェーンロックに目をやり、掛けようとするが、手が震えておぼつかない。

ガチャガシャする音が部屋の外にも聞こえる。

（廊下のドア前）

渡辺はドアの方を向いたまま、無表情で大宮に指示する。

渡辺「…鍵、開けろ」

大宮はカードキーを差し込み、「ピッ！」

と音が鳴る。

(部屋の中)

メンバーは、部屋に飛び込み、柿本を押しさえ込もうとする。

柿本「や、やめて下さい！」

メンバーは柿本をベットに押し倒す。
右腕、左腕、両足、頭と目を一人ずつで押しさえ込む。

渡辺が馬乗りになって、点滴麻酔(目薬)のような形のものを柿本の左目に近づける。

それを見る、柿本。

柿本「ち、違うんです！ 喋ったのは私じゃない！ 離して下さい！」

渡辺「そんなことは分かっていますよ、柿本さん！」

渡辺が柿本に顔を近づける。

渡辺「最初からこうなる予定でしたから！」

柿本、驚く。

柿本「最初からって…、騙したんですか!？」

渡辺「騙したなんて、とんでもない。予定が
変わらなかった、ということですよ」

渡辺、目薬を柿本の目に近づける。

柿本「ほ、本当にやめて下さい！」

渡辺、目薬を更に近づける。

渡辺「麻酔をかけますから、大丈夫ですよ。

それに、治療費は置いていきますから」

渡辺、目薬を更に近づける。

柿本の口が塞がれ、視界がぼやけて暗
くなる。

渡辺「ちょっとだけですから：」

暗転して、少しの間した後、「キュル！」
と短く高い音のモーター音になる。

○柿本のアパート（居間：夜）

アニメ「一騎当千」の呂蒙子明のコスプ
しをした、柿本がノートPCの前に座
っている。

椅子はメッシュタイプのゲーミングチ
ェア。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

部屋にはベットがあり、壁にはアニメのポスターが貼ってある。

デスクには、フルーツ型の消しゴムが10個ほど入った箱がある。

柿本がWebカメラに向かって、右腕を挙げる。

柿本「みんなさ、今日も、芸能系コスプレユーチューバー『まーさ』の生配信始めるよ
さ」

チャット欄に「こんばんは！」「今日も楽しみさ」「呂蒙、決まってる！」、絵文字のハートマークなどが流れる。

柿本「前にも言ったけど、私、これ一本でやってるから、良かったらスパチャよろしくね」

早速、スパチャが飛ぶ。

柿本は、スパチャを目で追う。

柿本「早速、ありがとう」

柿本「じゃあ、今日はアイドルネタで行こっか！」

始めようとした時に、部屋の呼び鈴がなる。

無視していたが、何度も鳴らされる。

柿本「みんな、ちょっと待っててね〜」

柿本はインターフォンに出る。

柿本「どなたですか？」

渡辺（声）「荷物の配達に参りました」

柿本「何か頼んだ覚えはないんですけど…」

渡辺（声）「しかし、配達しないと、私が怒ら

れますので…」

柿本は、画面を見る。

柿本「みんな、ゴメン。もうちょっと待ってね〜」

柿本は玄関口に向かう。

○柿本のアパート（玄関口…夜）

柿本「…まったく、タイミングが悪いな。今度から時間指定にしようか、宛先が間違ってるんじゃないのかなあ」

ドアの前まで来る、柿本。

チェーンロックはかけてある。

ドア越しに直接話す。

柿本「すいません、何を頼んだんでしたっけ？」

渡辺（声）「…どこでもいいですよ…」

不思議がる、柿本。

柿本「…どこでもって、荷物じゃないの？」

渡辺（声）「いえ、確かにあなた宛ですよ、…」

柿本さん「

柿本、声に聞き覚えがあることに気づ

く。

柿本「も、もしかして…、あの時の!？」

渡辺（声）「あの時の? よくわかりませんが。

何かお疑いでしたら、覗き窓から見て頂い

ても結構ですよ」

柿本、覗き窓から覗こうとする。

しかし、不穏な空気を察して、右に避け

て窓を開ける。

窓から勢いよく硫酸が飛び、玄関マッ

トを溶かす。

柿本、驚き、渡辺が配達員に化けている

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

ことを知る。

柿本「あなた…、帰って下さい！」

渡辺がドアを激しく叩く。

柿本「警察を呼びますよ！」

柿本、スマホを取り出し、外にも聞こえる大声で警察に通報する。

柿本「もしもし、警察ですか？ 私の家の前に不審者がいます！ すぐに来て下さい！
場所は…」

× × ×

柿本、ドアに向かって。

柿本「警察呼びましたからね！ 帰って下さい！」

柿本は覗き窓をガムテープで開かないようにする。

柿本「どこで、私の住所を…？」

柿本は、ドアに耳を傾け、様子を見る。
気配がないことを確認すると、居間に戻る。
気を取り直してパソコンの画面を見る。

柿本「みんなおまたせ〜。続きを始めるよ〜」

コメント欄に「大丈夫?」、「早く話始めて!」などのコメントが流れる。

柿本「じゃあ、最近、失速してるアイドルグループで行こうか! あのグループは、昔と比べて、TV出演が70%減っててね、その理由がさあ:」

柿本の話を遮るように、窓ガラスを割って、ポケモンボールのようなものが、投げ込まれる。

柿本はそれに目をやって、不思議がる。そして、ボールから男性の低い声が出てくる。

渡辺(声)「はははははっ。次は:どこかな?」

柿本は顔面蒼白。
クッションでボールを包み、窓の外へ投げる。

そして、雨戸とカーテンを閉める。

柿本M「まだ、いるの!? でも、警察を呼んだから、もう少しの我慢!」

柿本は、パソコンに向かい直す。

柿本「いやあ、今日はトラブルが多くって、ごめんね。気を取り直していこう！」

励ましのチャットが流れる中、ハンドルネーム「如月秀人1」名で5万円のスパチャが、「治療費。先払い」のコメントと共に流れる。「如月秀人2」でも5万円、「以下、「如月秀人3、4、5」と続く。柿本は凝視する。

柿本「!？」

コメント欄に「ナイスパ!」、「すげえ!」、「太っ腹!」、「治療費って何?」、「まーさ、どっか悪いの?」などのコメントが流れる。

そして、「如月秀人6、7、8」と同じ金額コメントのスパチャが流れる。柿本は目を見開く。

柿本「!？」

柿本は、手でノートPCを机から払う。ドアを叩く音と、雨戸を叩く音が始ま

る。

柿本は、震えながら、頭を抱えて机にうつ伏せになる。

頭の中をドアと雨戸を叩く音が舞う。

少しの時間が流れる。

音が止まる。

柿本「ははっ…、はははっ…」

柿本は瞬きせず、目を見開いたまま、頭を拳げる。

口は半開き。

柿本「ははははっ…」

柿本は視線をまっすぐ前を向いたまま、背筋を伸ばす。

そして、椅子を左右に軽く振りながら、

影 *s h a p e o f s h a d o w*

(一騎当千GGエンディングテーマ)

を歌い出す。

柿本「ラララ… ラララ…」

柿本は失禁し、尿が椅子の支柱を伝わって、床に滴り落ちる。

椅子の揺れを止めて、視線はまっすぐ。

柿本「お腹…、空いた…」

柿本は、机の上のフルーツの消しゴムを一つ手に取って、口に入れる。

モグモグと噛んで、ゴクンの飲み込む。

柿本は、口元を上げて笑う。

消しゴムを2個残して、ほぼ食べる。

柿本「…寝よ」

× × ×

※カメラは天井で固定。部屋全体。

柿本は、照明を付けたままベッドに仰向けになり、微動だにしない。

それが30秒ほど続く。

※カメラは柿本の横顔。

柿本は、よだれを垂らしながら、絞り出すような小声で、

柿本「もう…、やめて…」

暗転

E N D

(2025年6月15日 初出)

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

(2 0 2 5 年 1 0 月 1 日 単話アップ)